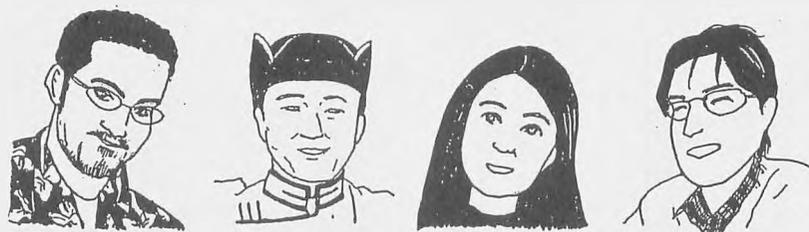


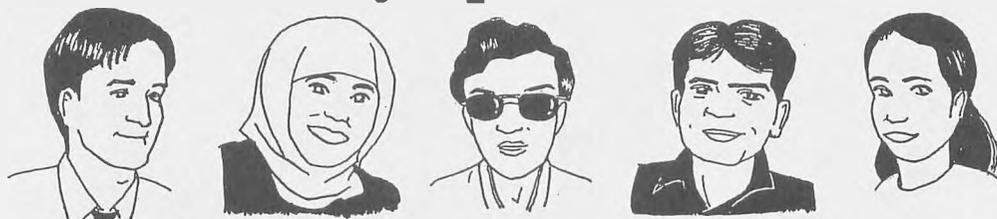
「アジア太平洋障害者の十年最終年記念」イベント

Pre-event of the Asian and Pacific Decade of Persons with Disabilities



国際障害者シンポジウム

International Symposium on Disability



報告書

Report

2002年6月22日(土)

会場：戸山サンライズ(東京都新宿区)

June 22 (Sat), 2002/ venue: Toyama Sunrise (Shinjuku, Tokyo, JAPAN)

主催：国際障害者シンポジウム実行委員会 [ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業第3期生]
財団法人 日本障害者リハビリテーション協会

協賛：財団法人 広げよう愛の輪運動基金
財団法人 キリン福祉財団

後援：アジア太平洋障害者の十年最終年記念フォーラム組織委員会／DPI 日本会議／
財団法人 全日本ろうあ連盟／全国自立生活センター協議会／アジア・ディスアビ
リティ・インスティテート／JBS 日本福祉放送

もく じ
目 次

Contents

1. 「国際障害者シンポジウム」プログラム 2
Program of 「International Symposium on Disability」
2. リーダー紹介
Profile
(i) アジアからのリーダー (愛称の五十音順) 4
Leaders from Asian Countries
(ii) 日本からのリーダー 13
Leaders from Japan
3. 午前の部 (オープニングセレモニー、シンポジウム) 15
Morning Session (Opening Ceremony, Symposium)
4. 午後の部 (まとめ) 31
Afternoon Session (Conclusion)
5. 大会アピール 39
Tokyo Appeal
6. 「ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業」事業概要 43
Summary of 「The Duskin Leadership Training Program in Japan;
A Program for Persons with Disabilities in Asia and Pacific」

「国際障害者シンポジウム」プログラム

| 時間 | プログラム | 内容/スピーカー | |
|-----------------|-------------------|---|---|
| 9:30～ | 受付開始 | | |
| 10:00～ 10:30 | オープニング・ セレモニー | 司会：シャフィク・ウル・ラフマン 挨拶：奥山 元保（日本障害者リハビリテーション協会） 祝辞：青柳 紀（財団法人 広げよう愛の輪運動基金） 中西 正司（ヒューマンケア協会） | |
| 10:30～ 12:00 | シンポジウム | テーマ：「私たちの挑戦 -すべての人の社会を目指して-」 シンポジスト： ◆ バク・チャノ（大韓民国） 「韓国の障害者運動」 ◆ チュチュ・サイダー（インドネシア共和国） 「インドネシアの障害児教育」 ◆ A・M・ヘマンタ・クマーラ （スリランカ民主社会主義共和国） 「スリランカの視覚障害者教育事情」 ◆ カッカ・ロケシュ（ネパール王国） 「ネパールの地域活動」 コーディネーター：樋口恵子（スタジオ IL 文京） | |
| 12:00～ 13:15 | 昼食 | | |
| 13:15～ 15:15 | グループ・ディ スカッション | テーマ | グループリーダー |
| | | 教育 | チュチュ・サイダー（インドネシア共和国） A・M・ヘマンタ・クマーラ （スリランカ民主社会主義共和国） オウ・ジョウ（中華人民共和国）[DAISY 発表] 大島智美（龍の子学園） |
| | | 障害者運動 | バク・チャノ（大韓民国） アマルタフシン・バザール（モンゴル国） メロディ・N・エスパニョール（フィリピン共和国） 尾上浩二（DPI 日本会議） |
| | | 啓発活動 | シャフィク・ウル・ラフマン （パキスタン・イスラム共和国） プスバナサン・ヴェラサミー（マレーシア） カッカ・ロケシュ（ネパール王国） 廉田俊二（車いす全国市民集会運営委員会） |
| 15:15～ 15:30 | 休憩 | | |
| 15:30～ 16:30 | まとめ | 各グループからのまとめ 大会アピール | |
| 17:30～ 19:30 | 交流会 | 司会：メロディ・N・エスパニョール 挨拶：東山 文夫（日本障害者リハビリテーション協会） | |

リーダー紹介

Profile

アマルタフシン・バザール（アマラ）

1. 氏名 しめい アマルタフシン・バザール
(Amartuvshin Bazar)
2. 性別 せいべつ 男性 だんせい
3. 年齢 ねんれい 28歳 まい
4. 障害 しょうがい 聴覚 ちやうかく
5. 国籍 こくせき モンゴル もんごる
6. 宗教 しゆきやう なし
7. 職業 しよくぎやう Association of Deaf Persons (聴覚障害者協会) でコンピューターの基礎知識を教
えている。
8. 所属団体 しよぞくだんたい Organization Persons with Disabilities in Mongolia(モンゴル障害者機構)
9. 興味のあること きやうみ コンピューター、政治、スポーツ
10. 一言 ひとこと



モンゴル出身のアマラです。ダスキンの研修生として初来日し、日本には進んだ福祉や活発な障害者運動があることを知りました。様々な研修を通して視野を広げることができました。またモンゴルとは異なる文化を持つ日本でたくさんの方々と交流できたこともよい経験になりました。このような機会を与えてくれたダスキン愛の輪基金には感謝の気持ちでいっぱいです。帰国後もがんばります。

モンゴル 豆知識

- 国名 こくめい モンゴル国 もんごるこく
- 面積 めんせき 156万6, 500平方キロ (日本の約4倍) まん へいほうきろ にほん やく ばい
- 人口 じんこう 238万2, 500人 (2000年) まん にん ねん
- 首都 しゆと ウランバートル うらんばーとる
- 人種 じんしゆ モンゴル人 (全体の95%) 及びカザフ人 もんごるじん ぜんたいの95% 及びカザフじん
- 言語 げんご モンゴル語 もんごるご
- 宗教 しゆきやう チベット仏教 (ラマ教) 等 ちべつ とぶつぎやう らまきやう とう
- 平均寿命 へいきんじゆみやう 男性 65.0歳 女性 68.0歳 だんせい さい じよせい さい
- 非識字率 ひしきじりつ 0.7% (男性 0.8% 女性 0.7%) だんせい じよせい

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局／統計センター 「世界の統計」

A・M・ヘマンタ・クマール (クマール)

1. 氏名 アッタナヤケ・ムディアンセラゲ・ヘマンタ・クマール
(Attanayake Mudiyansele Hemantha Kumara)
2. 性別 男性
3. 年齢 25歳
4. 障害 視覚
5. 国籍 スリランカ
6. 宗教 仏教
7. 職業 ボランティア講師
8. 所属団体 盲ろう者学校
9. 興味のあること 視覚障害者への教育、音楽
10. 一言



わたしは、にほんどスリランカのあいだにはしをつくりたいです。しょうがいしゃのもんだいはどのくにもおなじですから、あなたたちはわたしたちのころ、よくわかったとおもいます。いまスリランカはだんだんへいわなくになつて、しょうがいしゃのことももっとよくなるとおもいます。しごとやじょうほうのこと、スリランカでもっとよくなればいいですね。いいころとサービスをもっているあなたたちともだちになつて、とてもうれしいです。どうもありがとうございます。これからもよろしくおねがいします。

スリランカ 豆知識

- 国名 スリランカ民主社会主義共和国
- 面積 65,607平方キロ (北海道の約0.8倍)
- 人口 1,936万人 (2000年)
- 首都 スリ・ジャワルダナプラ・コッテ
- 人種 シンハラ人(74%)、タミル人(18.2%)、スリランカ・ムーア人(7.1%)
- 言語 公用語 (シンハラ語、タミル語)、連結語 (英語)
- 宗教 仏教69.3%、ヒンズー教15.5%、イスラム教7.6%、ローマン・カトリック教6.8%
- 平均寿命 男性 70.9歳 女性 75.4歳
- 非識字率 8.4% (男性 5.5% 女性 11.1%)

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局/統計センター 「世界の統計」

オウ・ジョウ（さよこ）

1. 氏名 しめい オウ・ジョウ
(Wang Zheng)
2. 性別 せいべつ 女性 じよせい
3. 年齢 ねんれい 25歳 さい
4. 障害 しょうがい 視覚 しかく
5. 国籍 こくせき 中国 ちゆうごく
6. 宗教 しゆうきやう なし
7. 職業 しよくぎやう 瀋陽市障害者連合会勤務 しんやうししょうがいしかれんごうかいきんむ
8. 所属団体 しよぞくだんたい 瀋陽市障害者連合会 しんやうししょうがいしかれんごうかい
9. 興味のあること きやうみ 音楽、カラオケ おんがく からおけ
10. 一言 ひとこと



障害者でも健常者でも、みんな一緒に幸せに生活できる世界をつくろうと思います。
皆さん、一緒にがんばりましょう！

中国 豆知識

- 国名 こくめい 中華人民共和国 ちゆうかじんみんきやうわこく
- 面積 めんせき 960万平方キロ (日本の約26倍) まんぺいほうきろ にほん やく 26ばい
- 人口 じんこう 12億6,583万人 (2000年) おおく まんにん ねん
- 首都 しゆと 北京 ぺきん
- 人種 じんしゆ 漢民族 (総人口の92%) 及び55の少数民族 かんみんぞく ちゆうじんこう および しょうすうみんぞく
- 言語 げんご 漢語 (中国語) かんご ちゆうごくご
- 宗教 しゆうきやう 仏教、イスラム教、キリスト教など ぶつぎやう いすらむきやう きりすときやう
- 平均寿命 へいきんじゆみん 男性 66.7歳 女性 70.5歳 だんせい じよせい
- 非識字率 ひしじりつ 15.0% (男性 7.7% 女性 22.6%) だんせい じよせい

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局／統計センター 「世界の統計」

M・シャフィック・ウル・ラフマン (シャフィック)

1. 氏名 むはまど・しゃふいく・うる・らふまん
(Muhammad Shafiq-ur-Rehman)
2. 性別 だんせい 男性
3. 年齢 ねんれい 25歳
4. 障害 しょうがい 肢体
5. 国籍 こくせき パキスタン
6. 宗教 しゅうきょう イスラム教
7. 職業 しよくぎょう NGOボランティア職員、家庭教師
8. 所属団体 しゆぞくだんたい Milestone (障害者支援NGO団体) でスポーツやイベント活動の企画運営
9. 興味のあること きょうみのあること 障害、統合教育や自立についての勉強。旅行。
10. 一言



せかいをかえるためには、ひとのいっしょうはとてもみじかいです。だからわたしたちはいっしょにはたらいて、つぎのひとたちのためのきそをつくらなければなりません。せかいをかえるためには、しゃかいをかえなければいけないとわたしはおもいます。だから、このダスキンあいのわのかんがえをアジアのくにぐにのあいだにリンクをつくっていきましょう。しょうがいしゃのために、アジアのくにぐにをかえましょう。

パキスタン 豆知識

- 国名 こくめい パキスタン・イスラム共和国
- 面積 めんせき 79万6,096平方キロ
- 人口 じんこう 1億4,250万人 (1998年推計)
- 首都 しゆと イスラマバード
- 人種 じんしゆ パンジャブ人、シンド人、パターン人、バルーチ人
- 言語 げんご ウルドゥー語
- 宗教 しゅうきょう イスラム教 (国教) 97%、ヒンズー教1.5%、キリスト教1.3%、排火教0.2%、
- 平均寿命 へいきんじゆみょう 男性 だんせい 62.9歳 女性 じよせい 65.1歳
- 非識字率 ひしきじりつ 56.7% (男性 だんせい 42.4% 女性 じよせい 72.2%)

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局／統計センター 「世界の統計」

パク・チャノ (チャノ)



1. 氏名 ^{しめい} パク・チャノ
(Park Chan O)
2. 性別 ^{せいべつ} 男性 ^{だんせい}
3. 年齢 ^{ねんらい} 32歳 ^{さい}
4. 障害 ^{しょうがい} 肢体 ^{したい}
5. 国籍 ^{こくせき} 韓国 ^{かんこく}
6. 宗教 ^{しゅうきょう} なし
7. 職業 ^{しよくぎょう} 正立会館 (Chung Nip ^{ほんりおせんたー} ポリオセンター) でソーシャルワーカーとして、
ピアカウンセリングなど ILプログラムの企画・評価・開発に従事 ^{そーしゃるわーかー}
8. 所属団体 ^{しよくだんたい} DPIソウル ^{そうる}
9. 興味のあること ^{きょうみ} IL運動 ^{うんどう} および CILサービス ^{きーびす}
10. 一言 ^{ひとこと}

いい世の中 (差別がない、皆が幸せに生きていける など) になるために
言葉ではなく、行動であらわしていきます。

韓国 豆知識

- 国名 ^{こくめい} 大韓民国 ^{だいかんみんこく}
- 面積 ^{めんせき} 約9万9,274平方キロ ^{やく まん へいほう きろ}
- 人口 ^{じんこう} 4,727.5万人 (2000年) ^{まんにん ねん}
- 首都 ^{しゅと} ソウル ^{そうる}
- 人種 ^{じんしゆ} 韓民族 ^{かんみんぞく}
- 言語 ^{げんご} 韓国語 ^{かんこくご}
- 宗教 ^{しゅうきょう} 仏教徒27%、キリスト教24%、その他儒教徒、天道教など ^{ぶつしやうと きりすときょう たじゆきやうただ てんどうきやう}
- 平均寿命 ^{へいさんじゆみやう} 男性 70.6歳 ^{だんせい} 女性 78.1歳 ^{じよせい}
- 非識字率 ^{ひしきじりつ} 2.2% (男性 0.8% 女性 3.6%) ^{だんせい じよせい}

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局/統計センター 「世界の統計」

チュチュ・サイダー（チュチュ）

1. 氏名 チュチュ・サイダー（Cucu Saidah）
2. 性別 女性
3. 年齢 27歳
4. 障害 肢体
5. 国籍 インドネシア
6. 宗教 イスラム教
7. 職業 YPAC（障害を持つ児童にリハビリサービスを提供する社会組織）の特殊学校教員
兼事務スタッフ
8. 所属団体 YPAC (Yayasan Pembinaan Anak Cacat)
日常生活に必要な技術、教育プログラム、職業訓練などを含む
リハビリテーションを提供する団体
9. 興味のあること 音楽、映画鑑賞、児童心理学
10. 一言



障害があっても障害がなくても同じ権利を持つ、どこの国ももっと仲良くなったらしあわせです。日本とアジアの国の間に本当のかけはしをつくりましょう！！！！

インドネシア 豆知識

- 国名 インドネシア共和国
- 面積 約192.3万平方キロ（日本の約5倍）
- 人口 約2.04億（1998年）
- 首都 ジャカルタ
- 人種 大半がマレー系（ジャワ、スンダ等27種族に大別される）
- 言語 インドネシア語
- 宗教 イスラム教87.1%、キリスト教8.8%、ヒンズー教2.0%
- 平均寿命 男性 63.3歳 女性 67.0歳
- 非識字率 13.0%（男性 8.1% 女性 17.9%）

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局／統計センター 「世界の統計」

プスパナサン・ヴィラサミー（ナディン）

1. 氏名 しめい プスパナサン・ヴィラサミー
(Puspanathan Vellasamy)
2. 性別 せいべつ 男性 だんせい
3. 年齢 ねんれい 25歳 さい
4. 障害 しょうがい 肢体 したい
5. 国籍 こくせき マレーシア まれいしあ
6. 宗教 しゅうきょう イスラム教 いすらむきょう
7. 職業 しよくぎょう ホテル勤務 ほてるくむ
8. 所属団体 しよぞくだんたい DAMAI障害者研修センター（スポーツ・コーディネーター）しょうがいしゃけんしゅうせんたー（すぽーつ・こーディネーター）
9. 興味のあること きょうみのあること バスケットボール、レース、テニス
10. 一言 ひとこと



わたしは、にほんでしょうがいしゃスポーツや車椅子のしゅうり、そしてかいぞうしゃのべんきょうをしました。そこでたくさんのひととはなし、まなんだことは、じっさいにくにでどうやってその idea をつたえるかのしゅだんをまなびました。くにかえったら、おおくのしょうがいしゃたちにつたえ、みんなでいっしょにがんばりたいです。

マレーシア 豆知識

- 国名 こくめい マレーシア まれいしあ
- 面積 めんせき 約33万平方キロ（日本の約0.9倍）やくまんへいほうきろ にほんのやく0.9ばい
- 人口 じんこう 約22.20百万人（2000年）やくひゃくまんにん ねん
- 首都 しゅと クアラ・ Lumpur くあら るんぶーる
- 人種 じんしゆ マレー系（62.8%）、中国系（約26.3%）、インド系（約7.5%）、
その他（3.5%）まれーけい ちゆうごくけい ぎん こんどけい やく
- 言語 げんご マレー語（国語）、中国語、タミール語、英語 まれーご こくご ちゆうごくご たいみーるご まいご
- 宗教 しゅうきょう イスラム教（連邦の宗教）、仏教、儒教、ヒンズー教、キリスト教、
原住民信仰 いすらむきょう れんぽうのしゅうきょう ぶつぎょう じゆぎょう ひんずーきょう きりすときょう げんじゆうみんしんこう
- 平均寿命 へいきんじゆうめい 男性 69.6歳 女性 74.5歳 だんせい さい じよせい さい
- 非識字率 ひしきじりつ 12.5%（男性 8.5% 女性 16.4%）だんせい さい じよせい さい

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局／統計センター 「世界の統計」

メロディ・N・エスパニョール（メロディ）

1. 氏名 しめい メロディ・ナネット・エスパニョール
(Melody Nanette Espanol)
2. 性別 せいべつ 女性 じょせい
3. 年齢 ねんれい 26歳 さい
4. 障害 しょうがい 肢体 したい
5. 国籍 こくせき フィリピン ふいりびん
6. 宗教 しゅうきょう キリスト教 きりすときょう
7. 職業 しよくぎょう なし (大学卒業後、研修のため来日) だいがくそつぎょうご けんしゅう らいにち
8. 所属団体 しよぶくだんたい SABAK CBR INC. (障害者やその家族を支援する組織) しょうがいしゃ かぞくを しえんする しゆじん
9. 興味のあること きょうみ コンピューターやインターネットの技能取得に興味。 こんぴゅーたーやいんたーねっとのぎのうしゆとく きりょうみ
10. 一言 ひとこと



にほんの しょうがいしゃの じょうきょうを まなぶことができ、とてもうれしいです。フィリピンと にほんの じょうきょうは おおきくちがいますが、しょうがいがあっても、ひとのいきかたは、さまざまいろで かがやいている にじのように あざやかなものです。わたしたちは おたがいにたすけあい、ひとつになることで つよくなれます。コミュニケーションは おたがいをしるために たいせつです。みなさんが わたしをゆうきづけ、わたしたちダスキンけんしゅうせいと、ちしきを シェアしてくれることに かんしゃします。よきリーダーとなれるようなアドバイスを ありがとうございます。わたしのたいせつなともだちへ。

フィリピン 豆知識

- 国名 こくめい フィリピン共和国 ふいりびんきょうわこく
- 面積 めんせき 299,404平方キロ (日本の8割の広さ) 7,109の島がある。 へいほうきろ にほんの わり ひろさ
- 人口 じんこう 75.3百万人 (2000年5月国勢調査値) ひやくまんにん ねん がつこくせいしやうち
- 首都 しゅと マニラ まにら
- 人種 じんしゆ マレイ系が主体。他に中国系、スペイン系、及びこれらとの混血、更に少数民族等がいる。 まれいけい しゆたい ほか ちゆうごくけい すべいんけい および こんけつ さら
- 言語 げんご 国語はタガログ語、公用語はタガログ語と英語。 こくご たがろぐご こうようご たがろぐご まいご
- 宗教 しゅうきょう カトリック83%、その他のキリスト教徒10%、イスラム教5% かとりくく 83% そのほかの きりすときょうと いたすらむきょう
- 平均寿命 へいきんじゆみん 男性63.1歳 女性 66.7歳 だんせい じょせい
- 非識字率 ひしきじりつ 4.6% (男性 4.5% 女性 4.8%) だんせい じょせい

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局/統計センター 「世界の統計」

ロケシュ・カッカ（ロケシュ）



1. 氏名 しめい ロケシュ・カッカ
(Lokesh Khadka)
2. 性別 せいべつ 男性 だんせい
3. 年齢 ねんれい 23歳 さい
4. 障害 しょうがい 聴覚 ちやうかく
5. 国籍 こくせき ネパール ねぱーる
6. 宗教 しゅうきやう ヒンズー教 ひんずーきやう
7. 職業 しよくぎやう 印刷工(Munal Offset Printers で折り畳み作業や機械操作に従事)
8. 所属団体 しよぞくだんたい Gandaki Association of the Deaf:GAD (ろう者のための地域組織形成、国内・国際間の協力体制づくり、政策決定における政府関係機関との連携などをめざす)
9. 興味のあること きやうみ ろう者社会でソーシャルワーカーとして活動したい。
10. 一言 ひとこと

日本の研修の中で印象に残っているのは、他の国や団体に頼らずに自分の団体の中で活動資金を作っていることでした。ネパールに手話通訳者養成センターを設立することが帰国後の目標です。

ネパール 豆知識

- 国名 こくめい ネパール王国 ねぱーるおうこく
- 面積 めんせき 14.7万平方キロ まんへいほうきろ
- 人口 じんこう 約23.9百万人 (2000年) やくひやくまんにんねん
- 首都 しよと カトマンズ かとまんず
- 民族 みんぞく リンブー、ライ、タマン、ネワール、グルン、マガル、タカリー等 りんぷーらいたまんねわーるぐるんまがるとかりーとう
- 言語 げんご ネパール語 ねぱーるご
- 宗教 しゅうきやう ヒンズー教 (国教) ひんずーきやうこくきやう
- 平均寿命 へいきんじゆみやう 男性 57.6歳 女性 57.1歳 だんせいさいじよせいさい
- 非識字率 ひしるじりつ 58.6% (男性 40.9% 女性 76.2%) だんせいさいじよせい

参考資料：外務省ホームページ各国・地域情勢 各国基礎データ
総務省統計局／統計センター 「世界の統計」

シンポジウムコーディネーター

樋口恵子 ひぐち けいこ (自立生活センター・スタジオ I L 文京)

- 1972年 高千穂大学入学、会計学を学ぶ。知的障害者の青年学級の活動を通し、障害福祉の領域で働き始める。
- 1976年 大学卒業後、社会福祉法人情報センター勤務。町田市重度障害者在宅訪問事業 (のちの市立ひかり療育園) 非常勤指導員、自助相談員として勤務。
- 1984年 広げよう愛の輪運動基金 (ミスタードーナツ) の研修生としてアメリカ留学。
- 1985年 ヒューマンケア協会設立に参加。DPI (障害者インターナショナル) 女性障害者ネットワークを立ち上げる。
- 1989年 町田ヒューマンネットワーク創設。
- 1991年 全国自立生活センター協議会 (JIL) を発足、副代表。ピアカウンセリングを全国に広める。(1995年～2001年代表)
- 1994年 町田市議会で初めての女性障害者議員に。(～1998年)
- 1995年 北京女性会議で優勢保護法の改正を訴え、翌96年の母体保護法への改正への尽力。アメリカ、アジアから障害者リーダーを招き、自立生活国際会議を開催。知的障害者や様々な障害者の国際会議への参加コーディネーター、リハ会議などに参加。
- 2000年 介護保険の障害者への適用を検討する「障害者ケアマネジメント体制整備検討委員会」(厚生労働省) 委員。

グループリーダー・教育

大島 智美 おおしま ともみ (龍の子学園)

生年月日: 1972年8月25日

出身地: 神奈川県横浜市

出身校: 幼～中学まで東京都立品川ろう学校
高校は川崎市立ろう学校卒

趣味: 貧乏旅行でアジア、アフリカ、中東、中南米などまわってろう者と会うこと、写真を撮ること、料理をすること

デラファミリー出身。

龍の子学園創立から二2年間幼稚部スタッフ、去年の4月から小低部スタッフとして現在に至る。

グループリーダー・障害者運動

尾上 浩二 おのうえ こうじ (DPI日本会議^{にほんかいぎ})

- 1960年^{ねん} 大阪に生まれる。小学校を養護学校、施設で過ごした後、普通中学・高校へ進む。
- 1978年^{ねん} 大阪市立大学に入学後、障害者問題のサークル活動をきっかけに、障害者の自立生活運動に取り組み始める。
- 1991年^{ねん} 全国初に導入された大阪市のリフト付きバスや、1992年秋に制定された大阪府「福祉のまちづくり条例」制定運動に積極的に取り組む。
- 1988年^{ねん} 東京・新宿で開催されたR I (リハビリテーション・インターナショナル) 国際会議の際に行われた交通アクセスデモ、国際連帯集会のスタッフとして活躍。以降、DPIの交通アクセス行動にはスタッフとして参加。
- 1995年^{ねん} 震災以降、障害者救援本部の一員として障害者自身の手による救援活動に取り組む。
- 2000年^{ねん} 200交通バリアフリー法制定時の国会(4月)で、参考人として意見陳述を行う。現在、自立生活センター・ナビ代表、ピア大阪常任委員、障害者総合情報ネットワーク世話人、DPI(障害者インターナショナル)日本会議事務局次長。大阪市障害者施策推進協議会専門委員、大阪市ひとにやさしいまちづくり推進本部専門委員、大阪市立大学生活科学部非常勤講師。

グループリーダー・啓発活動

廉田俊二 かどたしゅんじ (車いす市民全国集会運営委員会代表^{くるま しみんぜんこくしゅうかいうんえいいんかいだいひょう})

- 1961年^{ねん} 兵庫県姫路市に生まれる。
- 1975年^{ねん} 中学2年のとき、転落事故により脊髄損傷。以後車いすの生活となる。
- 1985年^{ねん} 鉄道を利用してヨーロッパ一周旅行をしたのがきっかけで交通問題に取り組む。
- 1986年^{ねん} 誰もが自由に乘れる電車を目指して、車いすで大阪一東京間を歩き、道中JRの各駅に立ち寄りアクセシブル設備を要望する活動「TRY」を開始。以後毎夏この活動を継続する。
- 1987年^{ねん} 著書「どこでも行くぞ 車いす!」ポプラ社を出版。
- 1987年^{ねん} 関西学院大学商学部卒業。
- 1987年^{ねん} 渡米しCIL「パークレイ自立生活センター」にて障害者の自立に関する諸問題を学ぶ。
- 1987年~1988年^{ねん} ヒッチハイクでアメリカ大陸横断。
- 1989年^{ねん} 第9回車いす市民全国集会・兵庫を開催。
- 1989年^{ねん} 兵庫県西宮市にてメインストリートむきあひ「リハビリ生活センター」を設立する。
- 1992年^{ねん} 車いす市民全国集会運営委員会の代表となる。
- 1993年^{ねん} 第一回全国高校生障害者リーダー大会「障害者甲子園」を開催する。
- 1995年^{ねん} 兵庫県福祉教育推進協議会委員。
- 1998年^{ねん} 明石海峡大橋開通記念渡り初めイベント「海上ピクニック」を企画運営する。

午前の部

(オープニングセレモニー, シンポジウム)

Morning Session

(Opening Ceremony, Symposium)

ごぜん ぶ 午前の部

おーぶにんぐ せれもにー オープニング・セレモニー

司会(シャフィク):おはようございます。

「国際障害者シンポジウム」によるこそお越し下さいました。このシンポジウムは、「アジア各国の障害者の生活をよりよくし、平和なバリアフリー社会と一緒に作りたい」というアイデアから生まれました。シンポジウムをきっかけにアジアと日本の人々がネットワークを作り協力していくことで、アジアのノーマライゼーション実現の助けになることを願っています。

はじめに、日本障害者リハビリテーション協会常務理事の奥山よりご挨拶をさせていただきます。

奥山:ただ今ご紹介いただきました、日本障害者リハビリテーション協会の奥山です。アジア太平洋障害者の十年最終年として10月から札幌、大阪で大会議が開かれますが、私はそのフォーラムの事務局長です。今日のシンポジウムは、ダスキン株式会社、ひろげよう愛の輪運動基金から委託を受け、日本障害者リハビリテーション協会が実施しております「ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業」第3期研修生が企画しました。日本障害者リハビリテーション協会では JICA の委託

で研修会もやっていますが、日本の国に何かを教えてもらって帰るという形式です。ところが、5年前に私どもが尊敬する先生が「参加型研修」を提案され、たいへん耳新しいこの研修をどう実現するかをずっと考えてきました。今日はその研修生たちが自分たちで全部プログラムを作り、参加された皆さんと一緒に語り合おうというすばらしい企画を作ってくれました。私はこの参加型研修の本当の姿を、ここに多くのご支援をいただいた JIL のみなさん、中西さん、樋口さんなどが主張されているエンパワーメントをどうやって障害者が発揮するのか？恥かしながら私自身、一日本国民としてどう実現するか、これまで意識してきませんでした。そういう意味で、アジア太平洋のみなさんが自分たちで、どういう研修を作りだしたのかということとを念頭において聞いていただけたらと思います。長くなりましたが、どうぞよろしくお願いたします。

司会(シャフィク):どうも、ありがとうございます。次に、財団法人広げよう愛の輪運動基金青柳様からご祝辞をいただきましたと思います。

青柳:おはようございます。3年前にこの研修事業を企画した時はどうなるものかと非常に不安でした。私どもは全くこういう世界には素人です。しかし、1期から3期まで続けてきて、リハ協の皆様はじめご関係の皆様方に大変お世話になったおかげで、

軌道^{まどろ}の^らって^ききたと^{じっかん}実感^{じつかん}して^おります。心^{こころ}から^{おれい}御礼^{ごれい}申^{まう}し^あげ^ます。私^{わたし}ども^だス^スキン^のの^お創^{そう}業^{ぎやう}者^{しや}は「釣^{つり}り^さ竿^{さん}は^{ようい}用意^{ようい}する^よ。し^かし^し釣^{つり}り^をする^のは^{みなさま}皆^{みな}様^{さま}方^が、後^{あと}は^{じぶん}自分^{じぶん}で^やり^なさい」と^り理^り念^{ねん}を^もつ^てて^おり^ました。ア^あジ^あア^あの^{けんしゅうせい}研^{けん}修^{しゅう}生^{せい}の^{みなさま}皆^{みな}様^{さま}に^も釣^{つり}り^さ竿^{さん}だ^けは^{ようい}用意^{ようい}さ^せて^いた^だく^ので、ど^んな^もの^を収^{しゆ}穫^{かく}する^か、ど^こで^釣る^かは^{ひとり}一^{ひとり}人^にお^お考^{こう}え^いた^だき、好^すき^なも^のを^たく^さん^の収^{しゆ}穫^{かく}を^して^くだ^さい^とう^いふ^いふ^願い^です。

来^{らい}日^{にち}後^ご3^がヶ^げ月^{げつ}間^{かん}集^{しゆ}中^{ちゆう}して^{にほんご}日^{にほん}本^ご語^{げんご}研^{けん}修^{しゅう}を^やつ^てい^ただ^きそ^れか^ら個^こ別^{べつ}研^{けん}修^{しゅう}に^はい^った^わけ^です^が、第^{だい}3^き期^き生^{せい}は^{たい}へ^ん優^{ゆう}秀^{しゆう}で^ござ^います。300^な名^な以^い上^{じやう}の^{おんぼ}応^{おう}募^ぼが^あつ^た中^{ちゆう}か^ら選^{せん}ば^れま^した。研^{けん}修^{しゅう}に、遊^{あそ}び^にと^うい^ふこ^とで^{にほん}日^{にほん}本^ご中^{ちゆう}を^かけ^まわ^つた^よう^です。今^{いま}日^{にち}、彼^{かれ}ら^が自^{みづ}ら^から^まか^くり^つあ^んし、こ^うい^った^{かいぎ}会^{かい}議^ぎを^かい^いた^とう^いふ^こと^は非^ひ常^{じょう}に^よか^つた^とい^いま^すか、こ^のよ^うに^{せい}成^{せい}長^{ちやう}し^たこ^とを^うれ^しく^おも^いま^す。こ^れか^らは^ねつ^とお^ーく^づく^りと^いい^ます^か、障^{しょう}害^{がい}者^{しや}が^て手^てを^たず^さえ^て成^{せい}長^{ちやう}さ^れる^こと^を心^{こころ}か^らお^お願^{ねが}い^しま^す。今^{いま}日^{にち}の^{かいぎ}会^{かい}議^ぎが^実り^ある^もの^にな^りま^すよ^う心^{こころ}か^らお^お願^{ねが}い^し、ご^{あい}挨拶^{あいさつ}に^かえ^ます。あ^りが^とう^ござ^いま^した。

司^{しかい}会^{かい}(^{しゃ}シャ^フィ^ク):あ^りが^とう^ござ^いま^した。次^{つぎ}に^ひヒ^{ュー}マ^ンケ^ア協^{きやう}会^{かい}代^{だい}表^{ひやう}、中^{なかにし}西^{せい}正^{しょう}司^し様^{さま}よ^りご^{しゆ}祝^{しゆ}辞^じを^いた^だき^ます。

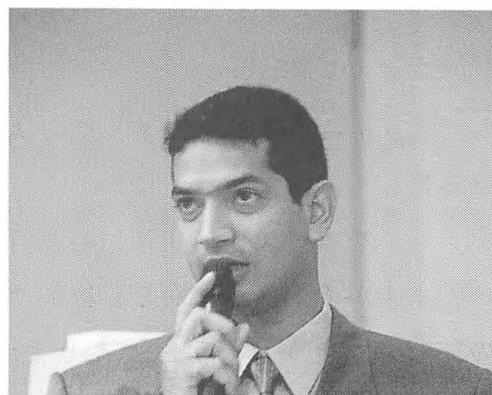
中^{なかにし}西^{せい}:^{はじめ}初^{しう}め^まし^て、中^{なかにし}西^{せい}で^す。全^{ぜん}国^{こく}自^じ立^{りつ}生^{せい}活^{かつ}セ^んタ^ー協^{きやう}議^ぎ会^{かい}の^{だいひやう}代^{だい}表^{ひやう}を^して^いま^すが、今^{こん}回^{かい}の^{けんしゅうせい}研^{けん}修^{しゅう}生^{せい}の^{みな}さ^んは、何^{なん}人^{にん}も^{じりつ}自^じ立^{りつ}

生^{せい}活^{かつ}セ^んタ^ー各^{かく}所^{しょ}で^{けんしゅう}研^{けん}修^{しゅう}を^され^てい^ます。現^{げん}地^ちで^{しょうがい}障^{しょう}害^{がい}当^{たう}事^じ者^{しや}同^{どう}士^しの^{かうりゅう}交^{かう}流^{りゅう}が^ふか^まり、語^かた^りあ^うと^うい^ふこ^とだ^けで^なく^{うんどう}運^{うん}動^{どう}に^つい^て熱^ねっ^ぽく^よ夜^や中^{ちゆう}ま^で語^かた^りあ^う、そ^んな^な障^{しょうがい}害^{がい}者^{しや}同^{どう}士^しの^{かうりゅう}交^{かう}流^{りゅう}の^{なか}か^ら電^{でん}動^{どう}車^{くるま}い^すの^{ちゆうこ}中^{ちゆう}古^こを^{にほん}日^{にほん}本^ごか^ら送^おく^ろう^よと^うい^ふ話^{はなし}も^{すす}ん^でい^ます。

韓^{かん}国^{こく}で^は自^{じりつ}立^{りつ}生^{せい}活^{かつ}セ^んタ^ーが^すた^ーと^して^おり^ます^し、今^{こん}度^どは^ぱキ^スタ^ンで^も自^{じりつ}立^{りつ}生^{せい}活^{かつ}セ^んタ^ーの^{しんてん}進^{しん}展^{てん}が^き待^{たい}さ^れて^いま^す。そ^うい^うい^ふ意^い味^みで^だス^スキン^のの^{みな}さ^んが^かえ^られ^たあ^と、そ^の芽^めが^{げん}地^ちで^そだ^ちふ^える^時期^きを^むか^えて^おり^ます。過^か去^そ3^{ねん}年^{ねん}の^{せい}成^{せい}果^{くわ}を^ふま^まこ^とし^{けんしゅうせい}研^{けん}修^{しゅう}生^{せい}は^ぐた^いて^き具^{けん}体^{たい}的^{てき}な^{けんしゅう}研^{けん}修^{しゅう}を^しま^した。こ^れま^での^{けんしゅうせい}研^{けん}修^{しゅう}生^{せい}は^いり^ぐち^で終^おわ^つて^いた^のに、今^{こん}回^{かい}は^{げん}地^ちに^もど^りり^かえ^られ^たと^うい^ふ意^い味^みで^は、研^{けんしゅう}修^{しゅう}の^{ない}内^{ない}容^{よう}が^これ^まで^より^いだ^んか^いすす^んだ^と認^{にん}識^{しき}して^いま^す。

今^{こん}後^ご、研^{けんしゅう}修^{しゅう}を^おこ^なわ^れる^{みな}さ^んが^{こん}回^{かい}で^きた^ど土^ど台^{たい}の^う上^{じやう}に、さ^らに^その^さき^きず^いて^いただ^ける^とお^もい^ます。我^{われ}々^{われ}も^{けんしゅう}研^{けん}修^{しゅう}内^{ない}容^{よう}を^ふか^めた^いで^す。あ^りが^とう^ござ^いま^した。

司^{しかい}会^{かい}(^{しゃ}シャ^フィ^ク):あ^りが^とう^ござ^いま^した。来^{らい}賓^{ひん}と^{こう}講^{こう}師^しの^ご紹^{しやう}介^{かい}で^す。時^じ間^{かん}の^{かん}係^{けい}で



お名前おなまえのみの紹介しょうかいです。財団法人ざいだんほうじん広げよう愛あいの輪運動基金わうんどうききん、山本好男やまもとよしお様。龍の子学園りゅうのこがくえん、大島智美おおしまともみ様。DPI日本会議にほんかいぎ、尾上浩二おのうえこうじ様。メインストリーム協会めいんすとりームきょうかい、廉田俊二かどたしゅんじ様。スタジオIL文京ぶんきやう、樋口恵子ひぐちけいこ様。主催者側しゅさいしやがわから日本障害者リハビリテーション協会にほんしょうがいしかりはびりてーしょんきょうかいの常務理事じやうむりし、奥山元保おくやまもとやす、事務局次長じむきょくじちやう、東山ひがしやまです。ここからの進行しんこうはコーディネイターこーでいねいたーである樋口恵子ひぐちけいこさんさんにお願いおねがいしたいと思おもいます。よろしくお願おねがいいします。

シンポジウム

「私たちの挑戦 ～すべての人

の社会を目指して～」

樋口ひぐち:おはようございます。午前のひぜんコーディネイターこーでいねいたーをします、樋口恵子ひぐちけいこです。よろしくお願おねがいいします。ダスキンのアジア太平洋障害者リリーダー育成事業だすきんのアジアたいへんやうしょうがいしかりーだーこいくせいじぎやうの研修生けんしゅうせいも3期目を迎むかえて、成果発表会せいこくはつひやうかいの闕いを越こえ、「これからの運れんたい帯たいというか、どうアジアの自分じぶんの国くにの中なかでここでの活動かつどうを生かかし、そしてつながりあっているのか」を考かんがえる時期じきに来きたようです。

午前中ひぜんちゆうは「私たちの挑戦ちやうせん—すべての人ひとの社会しやかいを目指して—」をテーマてーまにシンポジウムしんぽじうむを進すすめます。午後は各分科会かくぶんかかいにわかれますがその基本きほんになる分科会ぶんかかいの骨子こつしの部分ぶぶんをうたうという形かたちでやります。

みなさん、昨年さくねんの8月8がつに日本にほんに来日らいにちされ、3ヶ月3かげつの日本語研修にほんごけんしゅうを終おえて個別研修こべつべつけんしゅうを終おえ、10ヶ月10かげつ過ぎた今日けふは、日本語にほんごで発表はつひやうするというなかなかたいへんなことに挑ちやうせんしていただきます。シンポジストしんぽじすとの芳ほうは私わたしのそばからネパール王国ネパールおうこくのロケシュろけしゅさん、そのお隣おとなりはスリランカスリランカのクマーラくまーらさん、そしてチュチュちゅちゅさん、インドネシアいんどねしあです。一番遠いちばんとくにいるパクぱくさんは一番近いちばんちかい国くに、韓国かんこくからいらっしゃっています。

プログラムぷろぐらむの順番じゆんばんとは変わかわりまして、まず教育きやういくからということでチュチュちゅちゅさん、1番目ばんめ。2番目ばんめはクマーラくまーらさん、3番目ばんめは啓発活動けいはつかつどう、ロケシュろけしゅさん、そしてパクぱくさんということで。シンポジストしんぽじすとには15分程度15ふんていどのお話おはなし、分科会ぶんかかいに向むかう考かんがえ方かたを話はなしていただくという形かたちでやっていきます。ではまず、インドネシアいんどねしあのチュチュちゅちゅさんさんからお願おねがいいします。

チュチュちゅちゅ:おはようございます。インドネシアいんどねしあのチュチュちゅちゅ・サイダーさいだーと申まうします。まず、今日けふみんなと出あ会あえてうれしいです。ありがとうございします。

私わたしの話はなしをはじめたいと思おもいます。生まれた街まちはガルットがるとです。6才さいの時とき、養護やうご学校がっこうの小学部しょうがくぶに入はいりました。普通おつうの学校がっこうには入れませんでした。障害しょうがいをもつ人ひとは養護やうご学校がっこうに行いきなさいと言いわれました。ですから養護学校やうごがっこうに入はいりましたが、学校がっこうはバンドゥーンバンドゥーンという遠とい所ところにありましたので親おやと離はなれてしまいました。中学生ちゅうがくせいから大学だいがくまでは普通おつうの学校がっこうに入はいりました。住すむ

所は離れてしまいましたが家族はよくサポートしてくれました。

今日、私がお話したいことは3つに分かれており、1つ目はインドネシアの障害者、2つ目はインドネシアの障害者の教育、3つ目は日本での研修したことです。

インドネシアは障害者の人口が多いです。残念ながら正確なデータはありませんが今もその数はふえています。その理由は「a. 障害についての認識が低いb. 栄養不良c. 伝染病などいろいろな病気がある d. 国の中での戦争」です。日本はいろいろな障害者サービスがありますが、

インドネシアはあまりありません。例えば日本なら障害者は障害者年金をもらいますがインドネシアはまだもらえません。

インドネシアの障害者はだいたい家族と一緒に生活しています。障害者は仕事をしている人が少ないです。障害者は能力があっても仕事に入ることが難しいです。障害のない人は私たちの能力をみてくれない

からです。障害者の中には教育も受けてないし仕事もないので、自分で生活するお金がなくホームレスや物乞いになる人もいます。でも彼らは生きていかなければならないのです。インドネシアでは障害者は病気だと思っている人がまだ多くて障害者のこともあまり知られていません。障害者は家から出ないので社会もわかってくれないのです。

次は、インドネシアの障害者教育です。人間にとって教育は重要であり、誰でも適切な教育を受ける権利を持っています。

インドネシアでは学校に行けない人もまだ多いです。教育を受けてない人は障害者が特に多いです。教育を受けてないから良い職に就きにくい、そして良い職に就けないので収入が低くその子供は満足に学校に通うことができないという悪循環をうみます。結果、貧富の差が広がり、差別、権利侵害へとつながっていきます。障害児が教育を受けられない原因は多くあります。障害者に対する人々の理解が低いため障害を恥だと考えます。ですから、障害者は外に出られません。出かけたい、でもいろいろな問題があつて難しいです。車いすや杖もありません。障害をもつ子供に対する親の理解も低いのです。障害がある子どもは恥ずかしいとか何も出来ないと思う親がまだ多いです。学校の先生たちもそして社会も理解していません。



最後に、日本でいろいろな研修を受けて、一番心に残ったことについてお話します。私はインドネシアの障害者ですが、とてもラッキーです。大学を出て仕事をして、そして日本にきていろいろな研修を受けています。他の研修生ともいろいろ意見交換して、国の障害者のことも考えます。それ

で自分でやりたいことがみつかりましたが、一人の力ではできません。

日本では子供が楽しむことを第一に勉強をやっている、どんな障害があっても同じように教育を受けています。しかし、他のアジアの国はまだまだ同じではありません。研修生の中でいろんな問題を話しますが、インドネシアやフィリピン、スリランカ、パキスタン、ネパールもそうだと思います。どこの国の子どもも同じ人間ですから、障害があっても障害がなくても権利は持っていると思います。私たちはもうすぐそれぞれの国に帰りますが、帰ってからの大変だと思います。でも、自国の障害者のために、何かをしたいと考えています。これで、私の話は終わります。ありがとうございました。

樋口:ありがとうございました。すごく落ち着いて話してくれました。日本語がとても上手なのでみなさんも驚いたと思います。先ほど紹介し忘れましたが、16ページに彼女のスピーチの要旨があるのでご覧になってください。ありがとうございました。

次に、スリランカのクマーラさんから「スリランカの視覚障害者教育事情」というテーマで話をさせていただきます。資料は17ページに出ています。それではクマーラさん、お願いします。

クマーラ: 皆さん、おはようございます。今日は来てくれてありがとうございます。

今日はスリランカの視覚障害者の教育事情を話します。

私はスリランカのクマーラです。日本とスリランカが友達になって50年過ぎました。はじめにダスキン障害者リーダー養成事業の研修生になり、日本の視覚障害者のことを勉強することができてとても嬉しいです。スリランカになくて日本にある大切な教育のことをたくさん知りました。権利のこともわかりました。ノーマライゼーションのことなど、とても素晴らしい考えを習いました。障害者の問題はどんな国でも同じです。ただ、国の事情によって障害者を支える方法は違います。日本の視覚障害者を支えるサービスに私は感動しました。

まず、私のことを話します。私は、11年間盲学校で勉強しました。それから普通学校で2年間勉強しました。この学校は、私の父が校長をしていて色々な支えがあります。でも父親が校長でなかったら、私はこの学校へいけなかったと思います。また例えば貧乏な人、とてもパワーが少ない人だと教育は難しいと思います。それから大学で3年間仏教哲学を勉強しましたが、たくさん問題がありました。点字、通訳がとても大変でした。みんなは点字のことを全然考えないので点字の教材はほとんどありませんでした。通訳者も難しいです。家族がサポートしてくれたので私はなんとか勉強しました。音楽の試験も受けることができました。

スリランカの視覚障害者は大学で勉強

することができますが、勉強しても仕事は
とても少ないです。先生になって学校で
教える人もいますが、ほとんどの人は仕事
がないですから、もう一度家の中にとじこ
もり家族と一緒に生活します。貧乏な人が
多いので、家族に障害者がいると困ります。
視覚障害者が法律の勉強して弁護士にな
っても、障害のない人もこの仕事をするの
でこの仕事をやるのが出来ない人もいま
す。視覚障害者の人は自分で仕事を探すの
はとても大変です。家にいて仕事するのも
難しいです。

私は視覚障害者の働く機会を増やすた
めに、学校に新しい授産所をはじめたいと
思っています。仕事があればお金がしま
す。お金があれば、障害者の生活も良くな
ると思います。それから職業訓練
センターがあれば、視覚障害と知的障害が
ある人にも学校で勉強できるようになり
ます。スリランカでは知的障害者を
サポートする人は少ないです。私の兄も
視覚障害と知的障害を持っているので
教育を受けられませんでした。行政は補助
として、障害を持っている盲学校の学生
一人に10ルピーを出します。とても少ない
です。ほとんどの人は障害者だと仕事でき
ないと思っているので、障害者の生活は
良くなれないと思います。

たくさん問題がありますが、宗教が
一番の問題だと、私は思います。
スリランカで例えば、お坊さんのお金儲け
の考え方は良くないです。また、視覚
障害者の情報、私は勉強する時、点字の

教科書がとても少なかったです。点字の
雑誌も少ないです。点字印刷やいい紙があ
れば、点字の教科書、雑誌がもっと多くな
ると思います。政府も視覚障害者に点字で
送らないです。政府は私達視覚障害者の
点字のことを考えないです。テープや雑誌
も全然ないです。ひとつだけテープの
図書館がありますが、視覚障害者の機械が
ある施設がないです。手で書くのが大変な
のでいい機械が欲しいです。しゃべるパソ
コンも3台くらいだけで足りません。

1~5歳までの障害を持つ子供たちのこ
とを誰も考えていません。また、大学では
視覚障害者の教育について誰も
教えません。視覚障害者の教育のことを
知らない人が多く「あなたはどうかやって
点字を書きますか？」と私はよく
聞かれます。点字のことを知らない人が多
いです。医者も知らなかったりします。た
くさん勉強したい人を助けてくれないで
す。障害者の人は残念だと思っている人が
多いです。

スリランカでは25ヶ所盲学校があります。
点字が出来る人はとても少ないです。日本
で浜松の人たちと点字の辞書を作りました。
国でこの事業を続けたいです。私が働いて



いる学校で私たちは、全盲の人の音楽グループを作りました。でも楽器がないので、借りないといけません。お金がかかります。練習の時間も少ないです。いい楽器があれば、全盲のグループの人はとても喜ぶと思います。私たちの学校も、このようなグループとコンサートをやってお金を作りました。音楽を勉強できるいい場所も私の学校ではじめたいです。日本と同じようなカラオケが、視覚障害者の人に有名になればみな喜ぶと思います。そして、私たちももっと音楽が上手になります。

スリランカは戦争があります。政府が一番お金を使うのは、戦争のためです。戦争はもっともって障害者をつくります。とても悲しいことです。戦争で障害者になった人に政府はちょっと支える程度で、生まれたときから障害をもっている人を助けることは少ないのです。この考えはよくないと思います。戦争のために出すお金を全部、障害者を支える事業に出せばとてもいいです。障害者のことを考える、ダスキンのような会社もスリランカにはないです。

日本は平和な国ですから、私は日本が大好きです。私は政府の人と、何よりも平和のことを話したいです。いつかスリランカが平和な国になり、障害をもっている人の生活もよくなり、みんなが優しくなったら、私たちも心の底から笑うことができるでしょう。最後に、視覚障害をもっている人はたくさんいます。生活は大変ですが、私たちの夢は大きいです。できることを何

でもやりたいです。私は日本でいろんな経験をしました。このことを大切にして、日本とスリランカの間に橋を造りたいです。どうぞ協力してください。私は日本人と日本の音楽をととても愛しています。新しい音楽を教えてください。どうもありがとうございました。

樋口: ありがとうございます。すごくたくさんの方の提案があったと思います。一つだけ質問していいですか? クマーラさん、授産所を作りたいと言っていました。どんな中身を考えていますか?

クマーラ: 私の学校の校長先生も椅子を作ります。手で作るもの。ここでみんなに手で作る練習する場所を作りたいです。

樋口: 知的障害と視覚障害の人が一緒に働く場所?

クマーラ: 私の学校は盲ろうの学校なので、私の考えはどちらも一緒にできる仕事をする場所を作りたいということです。今、できることは何かを考えています。

樋口: ありがとうございます。では次に、ネパールからのロケシュさん、お願いします。ロケシュさんのペーパーは34ページにありますので御覧ください。

ロケシュ: みなさん、おはようございます。ネパールのボカラという町のろう協会の

活動について話します

ネパールには、貧しい人がたくさんいます。経済はずっとよくない状態で、これからもよくなることは無いと思います。道路もでこぼこで、視覚障害の人が歩くのに点字ブロックもなく出歩くのに不便です。川に橋もないので渡れません。そういう状態がずっと続いています。障害者は人口の10%、その中の36%が聴覚障害者です。でも、手話が使えないろう者は少なく、ろう者同士でも話ができないという状態が続いていました。

ポカラの町に意欲的なろう者が集まり、ろう者の支援をはじめました。そして、ポカラのろう者に自立心や誇りが少しずつ芽生えはじめました。今まで情報もなく何もわからなかったろう者が、ポカラを訪れ自立心と自尊心に目覚めて地域に帰っていくこともありました。そのろう者が地域のひとたちに情報を与え、そこで啓蒙活動を展開しはじめています。しかし、地方ではろう者に対する理解はまだまだ低いため、なかなか活動がうまくいきません。私たちも地方に赴き、いろんな活動を通じて啓蒙活動を行っています。でも、なかなか難しいです。

次に、ポカラのろう学校について話します。ポカラろう協会は1990年に設立されました。ろう協のメンバーも増えて現在72名です。ポカラでは1987年に、ろう学校が建ちました。しかしその活動は健聴者主導で行われていたので、ろう者は不満を持っていました。

ろう協会は、自分たちでろう学校を設立するために活動をはじめました。まず政府と交渉し、土地を無料で提供してもらい許可をもらいました。しかし、お金の調達がなかなかできませんでした。そこでイギリスの団体に資金援助を依頼しました。20人の視察団がポカラに派遣され、協議の結果、資金援助を得ることができました。そして念願のろう学校が設立できたのです。開校するとたくさんのろう児が入学してきてきました。しかし、問題も出てきました。通学の問題です。家が遠いため、毎日7キロの距離を歩いて通ってくる学生もいました。そこで全日本ろうあ連盟に要請をして、スクールバス購入のための資金援助をしていただくことになりました。そして、インドで中古のバスを買いました。今は、そのスクールバスで生徒が通えることになり、うれしく思っています。今、寄宿舎を建設中です。通うことが難しいくらい、遠い山間部に住むろう児を受け入れるためです。そんな子どもに教育の機会を与えるためには、無料で学校に通える環境を作る必要があります。そのために生活費をどうするかも考えなければなりません。ろう児のことを考えた学校づくりを行った結果、私達の学校はろう児を持つ親からも支持されるようになりました。そして、健聴者主導のろう学校は生徒がだんだん減っていき、閉鎖に追い込まれました。政府も私たちの学校に資金を援助してくれるようになりました。ネパールにはろう学校が6つあります。ろう

者は50万人いて、学校に通っているのはそのうちの2500人、残りは未就学児です。彼らは情報を知らずに生活しています。親も学校に子どもを行かせたくてもお金がありません。未就学のろう児は家に閉じこもって生活しています。



ろう協はそんなろう児の状況をいろいろと調査をして、寄宿舎設立やスクールバスの寄贈を政府に要望しましたが認めてくれません。

私はベニーという町で生まれ、3歳で失聴しました。田舎だったのでろう学校がありませんでした。それでベトナムのろう学校に入りました。20年前です。卒業後、ネパールに戻りました。大人になってから学校に入ることは難しいです。学校で学ばなければ、知識・情報面で遅れてしまいます。みんなポカラに来て学校に通うように訴えています。今、私たちの学校には100人以上の学生がいます。宿舎には30人の生徒が暮らしています。

私には知識も情報もありませんでした。しかし日本に来ていろんなことを勉強して、いろんなことがわかりました。ネパールに帰ったら日本で学んだことを生かしていきたいです。これで発表を終わります。

樋口:ありがとうございました。ろう団体として、とてもパワフルに活動してこられた経緯等を話していただきました。ロケシュさんは、午後は啓発のグループで、またお話しになります。

さてここまで、肢体不自由、視覚、聴覚という障害の区別を越え、また国の壁も越えて共に研修してきたわけですが、午前の最後は韓国のパクさんから「韓国の障害者運動」というテーマでお話しいただきます。

チャノ:皆さんこんにちは。韓国のパク・チャノです。よろしくお願ひします。

インドネシア、ネパール、モンゴルなど、アジアの国々の多くは、障害者の権利や福祉は依然としてよくないです。韓国は他の国より少しいいですが、まだまだ悪いと思います。皆さんに質問します。人間の社会は本当に平等ですか？昔は男性や権力をもっているお金持ち、パワーを持っているひとが強く、女性や障害者たちは平等に扱われていませんでした。社会は民主的に発展して少しずつ変化しましたが、まだ平等ではないと思います。

1年間、日本で研修をする中で障害者運動についてたくさん考えました。

アメリカの障害者たちは神ではなく人間と話しますが、アジアでは神に

語りかけます。でも、社会を作っているのは人間です。人間と話さないと、社会は変わらないと思います。話しても社会の差別はたくさんあるので、自分たちの

基本的な権利を守ることはとても大変だと思います。

しかし、社会運動によって、それは少しずつ変わって行くと思います。運動は新しい価値への新しい挑戦で、すべての人間のために平等な社会を作るのが運動だと考えます。運動の方法は色々あります。日本やアメリカでは要望書などの文書で行政に対してそれができますが、アジアの他の国でそれをやってもお金がない、時間がかかると言われて待たされるだけです。韓国を含めアジアの他の国では運動はとても難しいです。では、障害者はどうやって社会にアピールできますか？日本もアメリカも同じですが、障害者はデモや運動でパワーをつけてきました。韓国では自立生活の運動をしていますが、現在とても過激な運動を続けています。15分くらいビデオを見まじょうか。去年1月くらいに駅でエレベーター事故があり、障害者が亡くなりました。これがきっかけでデモがあちこちで起こりました。

(ビデオ)

事故が起こるたびにデモをして、対策の欠如に対して講義をします。2002年5月にも、地下鉄の駅でデモがありました。障害者の権利を拡大するためにです。障害者が亡くなくなってもいつもごめんねだけです。なぜ事故があったか、その説明がないです。警官たちが障害者を排除するだけです。私たちの要求は駅にエレベーターをつけることです。残念ながら、障害者にとって荷が不便か、一般市民は興味がないですね。

今映っているデモですが、私も参加していました。これは地下鉄のデモです。彼らは初めて地下鉄に乗って嬉しそうですね。しかし、駅にエレベーターは全然ありません。韓国では兵役制度があるので、軍人たちが準備して私たちを待ち構えていました。韓国ではエスカレーターが多いです。重度障害者も多いので、ボランティアや家族が移動を手伝います。このデモのときは車いすの人が多かったので軍人が待機していました。

地下鉄は8路線ありますが、バスが重要な交通手段なのでその運動もしています。これは障害者の移動権利を獲得する戦いのために、市役所の前でデモをしている様子です。政府に私たちの要求を話し、大統領との会談も要求します。「地下鉄の駅にエレベーターを、障害者もバスに乗れるようノンステップバスを！」というのがスローガンです。

韓国の障害者運動のリーダーは今必死に運動を続けています。障害者だけでなく大学の権利擁護サークルの学生たちも多く参加しています。「障害者はなぜバスに乗れないのか説明をしてほしい。移動する権利を！」と、一緒に叫びます。夜8時半ですがデモは終わりません。私たちはテントを作らず道で泊まりました。4時です。4月24日は朝から署名運動をスタートさせました。この夜、もう1度テント作りに挑戦しますがまた警官がきました。私たちは参加者がごく少ないのに警官は多くて大変です。3回目のテント作りに挑戦しましたが警官

たちと大きな喧嘩があります。喧嘩のとき、警官たちはいつも健常者のボランティアを全部逮捕します。次の朝からずっと警察は私達を警戒しています。市役所にテントを作る運動は続きましたが、結局私たちは作れません。政府は時間がない、お金がないと言うばかりです。私たちは全員警官に逮捕されました。警察署で1、2日泊まることになりました。市役所前のテントを作るのは難しいことが分かったのでソウル駅前にテントを作りました。署名運動もスタートし、子どもから老人まで一般市民が私たちの運動を応援しました。今年の2月20日までに17万人が署名に参加しました。移動権利の問題のためにイベントや祭りもしました。今流れているのは障害者移動権利の歌です。

韓国の社会運動は人望の厚い組織の人たちが、いつも参加して応援しています。「とても会えてうれしいです。参加してくれて嬉しい。あなたたちの関心が1日のものでなく、私たちの問題を解決するためにずっと参加して仲間になりましょう。」と呼びかけます。長い間、ソウル駅にテントを作って運動していますが、障害者は体も痛いしとても大変です。けれど、「私たちの権利のためにデモに参加してください。駅にエレベーターを作ってほしい、障害者もバスに乗りたい、その基本的権利を獲得するために運動しましょう。移動ができないと仕事もできません。一緒に参加してください。」と仲間を募っています。

地下鉄の駅での運動は初めてのことでし

たが、バスの乗り換え運動は毎月やっています。これは初めてのバス乗り換え運動の様子です。私たちはバスで4時間半くらい運動しました。文書で政府に要求を出しましたが、政府はいつも障害者問題は福祉問題だから待ってください。お金がないからすみませんと話します。毎月、バスに乗り換え運動をしていますが、参加者は多い時で200人くらい、少ないと10人くらいです。バスに自由に乗りたいので毎月運動しています。先月、韓国のリニダ二たちが日本でバリアフリーと自立生活の研修をしました。日本の移動運動は韓国より過激ではありませんが、とても効果があります。

日本の運動も20年程前までは、韓国より激しかったと聞きました。運動というのは、初めは過激ですがコミュニケーションができるようになったり社会が民主的だったりすると、その様子は変わると思います。例えば、5月27日、支援費制度のために日本で会合がありました。この日は300人くらいの障害者が参加しました。韓国より参加者も多いし、重度障害当事者だけです。一般健常者はいませんが、ある意味において激しい運動だと思います。

運動はとても大変です。初めからスマートな運動は無理ですが、サイクルはあります。最初は同じ問題意識を持っている人が、どうやって自分の要求をアピールするかを考えます。そして社会の変革が現れてくれば、机について説明するスタイルの運動ができると思います。運動

はとても大変です。とても悲しくさびしい。運動に参加するとき社会の目が冷たく、心が痛い。でも、一人では無理ですが仲間がいればできます。運動の時仲間は大切。韓国では自立生活運動をしていますが、ヒューマンケア協会など日本の自立生活センターが応援しています。いい仲間です。私も日本で研修に参加するまでモンゴルやフィリピンの問題は全然知りませんでした。今は仲間だと感じています。みなさん、私たちはアジア各国の障害者の権利や福祉の向上のために仲間になりましょう。



樋口: ありがとうございます。サッカーの人たち以上に命をかけていることがわかりました。バスに首や体を鎖で巻きつけデモを行う障害者、警察官や関係者がそれを切っていく。視覚障害者の方には残念でしたが、韓国の自立生活運動や移動権の獲得に対する韓国の障害者運動、日本のグループと一緒にになった運動があらわされた強烈なビデオでした。これで4つのシンポジストの方々からのお話は終わります。午後、それぞれの方々は3つの分科会に分かれて活動します。その前に質問のある方、この場でしかできません。

時間が少なくてもうしわけ、聞いておきたいことがあるという人はぜひ手を挙げてください。

中西: 中西です。チャノさんはこの研修でアジアの他国の状況がよく分かったとのことでしたが、それは4人の方それぞれ同じと思います。他国と比較した時、自分の国で何がよくて何が悪いかを1つずつあげてください。

樋口: 4人の方はおわかりになりますか？
では、ロケシュから。

ロケシュ: ネパールの聴覚障害者は情報がまったく入らないのが問題です。私は障害者運動について知識がなく、そのあたりの話ができずすみません。日本に来て初めて他の障害者について知りました。自分の国にいる時はわかりませんでした。日本では地下鉄にエレベーターがあり、リフトつきバスがあるなど、いろいろなことがわかりました。帰って運動していきたいと思えます。

樋口: ネパールで良いと言えることは？

ロケシュ: そうですね、山がとても有名でそこへ世界中の登山家がやってきます。障害者についてはごめんなさい。知識がなくて答えられません。申し訳ありません。

樋口: では、クマールさん。

クマーラ: 日本に来て一番いいと思ったのは自分の権利を持っているという考え方は。スリランカの人達は「視覚障害者は歌ってください」と言います。バスの中で私も「歌ってください」と言われたことがあります。これでお金をくれるのです。

樋口: 乞食ということでしょうか？歌って、お金をもらうのですか？

クマーラ: 歌ってお金をもらうのです。これは有名な視覚障害者の仕事ですが、良くないと思います。日本やアメリカにはこんな考えはないでしょう。

樋口: いいことは？

クマーラ: 今は法律ができて、大学に行つて勉強することができるようになった。これはいいことだと思います。

樋口: スリランカでは、障害をもった人も教育を受ける権利があるという法律ができたことによって、障害を持っている人が大学教育を受けられるようになったということでしょうか？

クマーラ: これは全員の教員もいますから、いいことだと思います。

樋口: 法律があるといったけど、そこまで有効に働いている法律ではないのですか？

クマーラ: 法律にはいいものも悪いものもありますが、社会の中でその進み方はゆっくりです。法律がもっと実際に履行されるようになればいいと思います。

樋口: では、チュチュさん。

チュチュ: 他の国と比べるとは難しいですね。でも、さつきチャノさんの話を聞いて思ったのは、インドネシアの障害者運動はまだ、何もはじまっていないということです。みんな家にいて外には出ません。たぶん、みなさんインドネシアにきたらびっくりしますよ。「え？障害者はいないの？」と。でも家にいっぱいいます。韓国では障害者運動が盛んですが、インドネシアはまだ何もありません。1997年に障害者の法律ができましたが、選挙の時に票取りのために話すだけです。セオリーだけで、プラクティスは何もありませんが現状です。

例えば会社で社員100人のうち1人は障害者を入れなければいけないという法律がありますが、どの会社もそれを守っていません。教育も同じです。みんなが教育を受けられるように、例えば聴覚障害や視覚障害、肢体障害、みんな同じ大学に入りたいのですが、それを実践することはなかなか難しいです。特に、専門家は障害者に理解が全くありません。例えば私が学校に入りたい時に「あなたは障害があるから入れません」と言われます。たくさん問題があるので自分の国の良くないことはたくさん言えますが、良いことは言えま

せん。

樋口：雇用促進法のようなものがあるけれど、実質的には確立していないということね。チャノさん、韓国はどうですか？

チャノ：韓国にも結構、色々な法律がありますが弱いんです。ベチルティもありません。法律には役割、責任がないです。地位とか将来がないので、障害者の生活はとても大変です。法律はありますが、予算がないので名目だけの法律です。でも、私の国のいいことは、自分たちの問題を自分が参加して解決しようとする若い障害者が多いことです。以上です。

樋口：ありがとうございました。本当にそうですね。ビデオでも充分表現されていました。午前の部はこれで終わって、引き続き4人のシンポジストの方々、プラス今回アジアから乗られた他の研修生が、三つのグループに分かれて「教育」、「障害者運動」、「啓発」とテーマ別にディスカッションを行います。どうも皆さん、ありがとうございました。

午後の部

(まとめ)

Afternoon Session

(Conclusion)

ご ぶ 午後の部

グループ・ディスカッション

まとめ

かどた 廉田: それでは、第三部のまとめに入ります。それぞれのグループでディスカッションはうまくいきましたか？ 反応がないですね。それではディスカッションをまとめてください。まずは教育のグループからです。チュチュさん、お願いします。

ちゅちゅ チュチュ: みなさん、私とクマールと大島さんは教育をテーマにして話しました。

私が司会をしたのですが、日本語が難しいのであんまりうまくできませんでした。

でも、みんなが話すのを聞くことができました。教育はやはり大切なのでいろんな障害、例えばろう者だけではなく、視覚障害だけでもなく、いろんな障害があっても一緒にやったらとてもいいです。それでネットワークのことは、物の関係ではなく、技術や情報を皆さんからもらうことがとても大切です。学校では、例えば算数とか国語だけではなく人間の教育が大切です。難しいので私からはこれだけです。足りない部分を大島さんをお願いします。

おおしま 大島: 教育のディスカッションの中で、情報交換のネットワークをどうすればいいかという話が出ました。しかし、アジア各国では物資が不足しているので、それを

どう支援するかということに話が出ていってしまいました。物質的な支援も大切ですが、障害者に対する回りの理解を深めることが大切だと思います。障害と一言で言っても多種多様です。それをふつうの学校に通う子どもは知りません。そういったことを学校で話をして子ども達が受け止めていくことが大切です。そうすれば社会に入った後でも受け止めることができます。教育は、国語、数学、社会などの教科の勉強だけを指すではありません。小さいときから教科の勉強だけでなく、いろいろなことを学ぶのがいいと考えています。

かどた 廉田: ありがとうございます。発表してもらったのは、龍の子学園の大島智美さんでした。申し遅れましたが、司会のメインストリーム協会の廉田です。よろしく。

続いて二つ目のグループ、障害者運動から DPI 日本会議の尾上さん、お願いします。

おのうえ 尾上: レポートはお手元の資料26ページから載っています。午前中の発言者のパクさんを受けて、まずはアマラさんからモンゴルのろう協会ならびに障害者運動について報告をいただきました。モンゴルでは視覚障害者と聴覚障害者が一緒に協会を作っていたが、情報の共有やディスカッションを行うことが難しかった

ため、別団体として活動することになりました。現在、ろう学校が国内にひとつしかないのです、地方に住むろう児は教育を受けるのが難しいという報告もありました。また、視覚障害者や肢体障害者は他の国々の情報に精通しているのですが、ろう者はそれが難しい。情報が不足しているため、活動や取り組みを進めるのが困難であるという報告がありました。

次に、フィリピンのメロディさんから報告がありました。フィリピンでは10年ほど前にマグナカルタという障害者の法律が制定されました。いいことは書いてありますが、実際の行動計画は少なく、例えばほとんどの学校に車いすトイレやエレベーターあるいは点字ブロックなどが無いということです。また、交通機関に関してもバスやジプニーという乗合の乗り物がありますがアクセシブルではない、手動の車いすであれば場合によっては乗せてもらえるが電動はだめです。フィリピンでは7月の第2週が障害者週間と決まっています、その時に学校で障害者の人権について話し合ったり障害者の理解を深めるためのパンフレットを作って配ったりするという報告がありました。

イベントを地域で開催する時、いろんな障害を持っている人が自由に参加できる状況はあまりないという報告もありました。例えば、この会場には手話通訳と要約筆記がついていますが、こういった保障が行われてないため自由に参加できないということでした。

そして、最後に私から日本における障害者運動の歴史と課題ということで報告を行いました。1970年代から始まった自立生活運動の特徴は、それまでは親や専門家中心の運動であったのが障害者主体となったことです。そして障害の克服や治療でなくバリアフリーや差別からの解放、地域からの自立を目指して進めてきました。80年代に入り、DPI日本会議という恒常的な国際ネットワークができましたし、同じ年にヒューマンケア協会という日本初の自立生活センターができました。現在、自立生活センターは全国100ヶ所を超えるまでになっています。90年代以降、ようやく国レベルでのノーマライゼーションに向けた具体的な動きが見られるようになり、障害者基本法が制定され各自治体で街づくり条例ができたという報告をしました。



これらの報告を受け「日本ではここ20年間で交通機関を使えるようになってきたが、地方に行くとノンステップバスが走っていないし、未だにバスの乗車拒否がある。また、日本で作ったバスや電車車両が中古となってアジアで売られている現状から考えると、日本がよいものを

作らなければ、アジアの国々にも迷惑をかけることになる。」という指摘が会場からでした。

さまざまな違いを認め、かつ、壁を乗り越えてネットワークを作っているということに関して、いくつかの質問が会場からあがりました。一つは、日本の場合脳性マヒの人たちが中心となって70年代に運動に取り組んできたが、他の国の障害者の状況はどうかという質問がありました。もう一つは、モンゴルのアマラさんの話にあったようにろう者は情報が制限され、あるいは他の障害者のコミュニケーションがうまくいかないということだが他の国はどうだろう、障害別を越えた運動や連帯が必要だが、どうなっているかという質問がありました。いずれの国も障害別を越えたネットワークという点では、まだ課題があります。ただ、韓国では自立生活センターができ、これにより重度の障害者が積極的に運動に参加しているという報告がありました。

他に、日本の経験を反面教師としてどう生かしていくかという質問がありました。日本では1970年代にかけて施設がどんどん作られました。そういう流れに対して、地域での自立を求める運動がおきました。いったん施設や養護学校にたくさんの金や人が投じられると、それをもう一度地域に持っていくのは大変です。だとすれば、アジアの国々でこれから障害者のサービスや資源を作る時、新たな施設を作るのではなく最初から地域生活支援及び

自立生活にターゲットを置いた資源を作った方がいいのではないかという提起がありました。

特に重要なのは、どういった方向でどういったサービスが必要かという情報や考え方はです。それがネットワークなのかなと思いました。そういった討論を受け、特に今回のセミナーではアジア・太平洋を軸にした障害者の権利のためのネットワークを作りたいという皆さんからのまとめをいただきました。力強い分科会でした。終わります。

麻田:ありがとうございました。啓発のグループについては、私から話します。啓発に関しては、出来る限り会場とのやりとりを中心にして進めました。ロケシュというネパールのろう者、シャフィク肢体不自由でパキスタン、もう一人はナディン肢体不自由、その三人が15分くらい話してくれました。

啓発そのものの広い意味は、自分たちのことをまず知ってもらわないと何もはじまらないということで、話の内容は自分の国の話や自分史でした。具体的には、それぞれの国情や自分が体験してきた学校生活についてです。どこの国でも同じだと思いますが、障害があるから学校に入れないという話がよく出てきました。車いすがないとか、自分は車を運転できるようになったけど、それも最近の話で前は車の免許さえもとれなかった。運転はできるけど障害者が改造した車を運転するこ

とを国は認めてないとか、国によって微妙に状況は違います。ネパールではバイクの運転さえも耳が聞こえないという理由で免許が取れなかったが、色々な運動の成果が実りやと免許が取得できるようになったという話がありました。しかし、これは面白かったのですが、一度交通事故を起こしたらその瞬間に免許を取り上げられるそうです。またネパールの場合、手話通訳という存在自体がすごく少ないそうです。手話で人と話すこと自体が恥ずかしい行為で、手話で話している姿を家族あるいは他人に見られたくないと考える人が多く、手話通訳になってくれる人がなかなか増えないのが現状だそうです。また、手話通訳があること自体、山間部では全く情報として知らされてないという話が出てきました。

また、それぞれが仕事を持っているけど、どんな仕事をしているか、給料はいくらかという質問が会場からありました。人の懐が気になるのが日本人の特質ですので(笑)。シャフィクは結構いい給料をもらっていました。パキスタンでは健常者の収入が平均2~3万くらい。シャフィクの場合は2万くらいだそうです。

チディンは、5星ホテルで働いていて月給は8万くらい。健常者と比べたら、ずいぶんと安いそうです。

ロケシュはろう者であることが仕事そのものに影響はなくても、なぜか仕事がなかなか長続きせずコロコロ変わるそうです。なかなか長続きせず、ペンキ屋からはじま

ってプニルバーニを友達と経営したこともあったが喧嘩別れしたそうです。一般的な月収が1万、それが2,000円ぐらいに抑えられるのが障害者の状況です。

また、啓発とどうが関係あるのかという話になりますが、日本で風呂一緒に入ったことがありますか？という質問もありました。自分を知ってもらおうということだから、風呂にも入ってもらわなければならないということです。一応、皆恥ずかしかつたけど、大浴場には入ったことあるそうです。

加えて、「帰国後、日本で学んだことを広めていくためにはセミナーを開いたり、あるいはデモンストレーションを行ったりするのですか？」という質問がありました。午前中に韓国のビデオにありましたが、あそこまでいなくても、皆で行進することで警察につかまったりすることがあるのだろうか？デモは啓発としてマスキングを通じて知ってもらえますからね。チディンは、マレーシアで障害者自身がやっているデモを見たことがないということ。

ネパールではある。パキスタンではデモや行進をしたくても重いはずがないから、出ていく段階まで行っていないそうです。そんな中で面白かったのは、自分たちで社会を変えるためには動かかけなければならないが、そのために行進すること自体が健常者の文化じゃないか。健常者が作った市民運動を通じてやるのではなく、障害者独自のデモンストレーション、そういう文化を築くなかで啓発をやりたい。それはひよつとすると公園の芝生で歩けないから音楽を

歌うとか、そういうことになるかもしれませんが、そういうことを通じて伝えていきたいという意見もありました。

今後、自分たちの国に帰ってどのようにしていきたいかという話もありました。障害者運動の分科会からも報告がありましたが、ネットワーク作りをしてゆきたい。1年に1度くらい研修生の出身国で、セミナーやイベントを開いて情報交換ができればいいなという話がありました。

ちなみにパキスタンでは、来年の2月にシンポジウムあるいはオリジナリティあふれるデモを企画しています。国内で政府に様々な要求をしていくことも大切だが、海外から刺激を受けることで聞く耳を持つという政府の状況もあるので色々な国から参加して欲しいそうです。そして啓発活動を続けていきたいということです。特に、パキスタンにはめったに行くこともないでしょうから来てくれたらうれしいです。ぼくも行きたいなあと思います。ちょうど2月には嵐上げ大会があるそうです。パキスタンの嵐上げをばかにしてはいけま

大会アピール

チュチュ:大会、国際障害者シンポジウム大会アピール、私たちがインドネシア、韓国、スリランカ、中国、ネパール、フィリピン、マレーシア、モンゴルの九カ国からの第三期ダスキニアアジア太平洋育成事業研修生は、日本のリーダーの協力とともに

せん。どれくらいあげるかというのと、4000mだそうです。雲の中に入ったたり出たりします。それを見るためでもいいのでぜひとも日本から行ってください。シャフィクの曾おばあちゃんは135才です。その人と会うだけでも行く価値があるでしょう。皆さん、135歳の人とは話したことないでしょうが、120歳ぐらいになると新しい歯が生えてきます。シャフィクは誠実なすばらしい青年です。ぜひともそのおばあさんに会いたいので、僕はパキスタンに行こうと思えます。

以上で啓発の報告を終わります。これで、三つの分科会全部の報告を終了します。ありがとうございました。(拍手)

最後になりましたが、今回のシンポジウムは初めて研修生が中心になって開いたものです。研修生たち前に出てきてください。全員よく顔が見えるように一列に並んでください。大会宣言をこれから読上げたいと思います。一生懸命考えましたよね。宣言文を読むのはチュチュさんです。お願いします。に2002年6月22日土曜日、東京において国際障害者シンポジウムを開催しました。

全国各地からの参加者、スタッフなどの総勢180名が集まり、アジア太平洋地域の障害者にかかわる三つのトピック、障害者運動、教育、啓発活動について、話し合いました。

アジア太平洋諸国における障害者の現状は、いまだ大変な状況にあります。

大きな理由のひとつは情報の不足だと
えるでしょう。情報、特に、ロールモデル
としての当事者からえる情報は、障害者を
エンパワーメントするのに大切です。
障害者と周りの人々の意識改革なくして、
社会変革はありません。それを進めるには
当事者とサポーター相互の理解と協力が
しでは実現しないでしょう。

今年はアジア太平洋障害者の10年の
フォーラムが日本で開催され、世界各国か
ら障害者が一度に集います。さらに、来年
以降障壁からの解放をテーマにした
アジア障害者の次の10年が始まります。
様々なバリアをなくし、障害者の自立、
社会参画を進めていくためにネットワーク
を作り、情報と経験を分かち合うことが
求められています。

こうした認識に立ち、アジア太平洋自立
生活ネットワーク (APNIL) を作り以下の
目的を実現するために、共に歩んでいくこ
とをここにアピールいたします。

名称：アジア太平洋自立生活ネットワーク

目的：障害者の自立生活の理念を広め、
障害者のエンパワーをする。障害者の教育、
雇用生活のあらゆる面における社会参加を
実現する。人権を獲得するため、権利保障の
ための策定や制定に向けて働きかける。あ
らゆるバリアからの解放を目指す。情報や
経験を共有し、国々の協力関係を強める。
ありがとうございました。

チャノ：私たちのネットワークに同意、参加
してくれる人は紙に書いてこの箱に入れて
ほしいです。私たちのネットワークは、ま
だ名前しかありません。まだ生まれたばかり
ですが、大切に力を尽くして育てていき
たいと思います。そこで皆さんにお願いが
あります。皆さんも協力してください。外
に箱があります。少しでいいので、寄付し
てください。よろしくおねがいします。

藤田：これで本当に最後です。1日を
通じてのシンポジウムのまとめを尾上さん
からお願いします。

尾上：今日一日ご苦労様でした。今回この
集会を企画した研修生9人が、それぞれの
国で研修の成果を活かして障害者の状況
を変え障害者運動の発展のために活動し
たい、そういった熱い思いが伝わってくる
シンポジウムではなかったかと思えます。



また、集会参加者一同で確認した大会
アピールは、大変重要なものではないかと
思えます。ここに書かれてあるとおり、今年
でアジア太平洋障害者の第一次の十年は
終わりますが、来年からは第二次の十年が
始まります。第二次のテーマは、そのも

のずばり「障壁からの解放、バリアからの開放」です。これで次の十年を進めていくことになります。

いろいろな分科会の中で、障害者自身^{しょうがいしゃじしん}が当事者^{とうじしや}として果たすロールモデルとしての役割^{やくわり}が強調^{きやうきやう}されていたと思います。開放からの十年^{じゅうねん}を推進^{すいしん}していく第一^{だいいち}の力は障害者^{しょうがいしゃ}の活動^{かつどう}であり、障害者自身^{しょうがいしゃじしん}が誇り^{ほこり}をもって生きていく、そういう意思改革^{いしかいかく}こそが社会^{しゃかい}を変えていく大きな力^{ちから}になると思います。

今^{いま}から20年^{20ねん}以上前^{いじょうまえ}ですが、やはりその当時^{とうじ}もダスキンさん^{だすきんさん}から一方^{ひとかた}ならぬ支援^{しえん}をいただき、日本^{にほん}の障害者^{しょうがいしゃ}がアメリカ^{あめりか}の自立生活センター^{じりつせいふくせんたー}で研修^{けんしゆ}を行いました。その動き^{うごき}が10年^{10ねん}20年^{20ねん}経^たって、日本^{にほん}で100カ所^{100かしょ}以上の自立生活センター^{じりつせいふくせんたー}を設立^{せつりつ}する動き^{うごき}に発展^{はつてん}し、交通バリアフリー^{こうつうばりあふりー}を求めて特^{とく}には激^{げき}しく運動^{うんどう}を展開^{てんかい}し、「交通バリアフリー法^{こうつうばりあふりーほう}」の成立^{せいりつ}に漕ぎ付^{こぎつ}けることができました。同様^{どうよう}にこの大会^{たいかい}アピール^{あぴーる}で立ちあげたアジア太平洋自立生活ネットワーク^{あじあたいへいようじりつせいふくネットワーク}が、今日^{こんにち}ここにいる一人一人^{ひとりひとり}が主体的^{しゅていてき}に参加^{さんか}し、あるいは仲間^{なかま}に呼びかけることで、強^{つよ}くより向上^{こうじやう}的なものになっていって欲しい^{ほしい}と思います。

このネットワーク^{ネットワーク}を障害者自身^{しょうがいしゃじしん}が10年^{10ねん}続^{つづ}ければ、まさにバリアからの開放^{かいほう}が達成^{たっせい}できるでしょう。10年^{10ねん}後^ごにはサンライズ^{さんらいず}が出発点^{しゅつぱつてん}だったこのアピール^{あぴーる}が、「アジア太平洋^{あじあたいへいよう}地域^{ちいき}を変えた出発点^{しゅつぱつてん}だったな」と振り返^{ふりかえ}れるよう、次の10年^{10ねん}のスタート^{たっせい}をこのネットワーク^{ネットワーク}をもって進^{すす}めていきたいと

思います。

このシンポジウム^{しんぽじうむ}を通じて、それぞれの国情^{こくじやう}、いろんな障害^{しょうがい}の違い^{ちがひ}、それぞれの情報^{じやうほう}、経験^{けいけん}を学びあ^{まな}びあうことができた^{できた}と思います。このように情報^{じやうほう}、経験^{けいけん}を分かち合^あえるような、共に参加^{まな}すれば皆^{みな}がパワー^{パワー}をもらえる、エンパワーメント^{エンパワーメント}されるようなネットワーク^{ネットワーク}として発展^{はつてん}してほしいと願^{ねが}い、まとめて変^かえさせていただきます。みんなでこのネットワーク^{ネットワーク}を発展^{はつてん}させていきましょう。

かどた 廉田：最後に、主催者^{しゆさいしや}の日本障害者リハビリテーション協会^{にほんしょうがいしゃりはびりてーしょんきやうかい}の奥平^{おくひら}からご挨拶^{ごあいさつ}をさせていただきます。

おくひら 奥平：長時間^{ちやうじかん}のシンポジウム^{しんぽじうむ}であったにもかかわらず、こんなに大勢^{おほぜい}の方が最後^{さいご}まで残^{のこ}ってくださりうれしく思います。このシンポジウム^{しんぽじうむ}は研修生^{けんしゆせい}のアイデア^{アイデア}から生まれ、彼ら^{かれら}が準備^{じゆんび}をしてきました。さきほど尾上^{おのうえ}さんが言^{いわ}れたように、これはスタート^{スタート}です。みなさんの協^{きやう}力を得^えて、盛り上げて行^いきたいと思います。ありがとうございました。がんばってくれた9人^{9にん}と、スピーカー^{スピーカー}、コーディネーター^{コーディネーター}の皆さん^{みなさん}、研修課^{けんしゆか}のスタッフ^{スタッフ}、お疲れ^{おつかれ}さまでした。拍手^{はくしゅ}をお願いします。ありがとうございました。

かどた 廉田：ありがとうございました。

大会アピール

Tokyo Appeal

国際障害者シンポジウム

大会アピール

私たち、インドネシア、韓国、スリランカ、中国、ネパール、パキスタン、フィリピン、マレーシア、モンゴルの9カ国からの第3期ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業研修生は、日本の障害をもつリーダーの協力と共に、2002年6月22日(土)、東京において「国際障害者シンポジウム」を開催しました。全国各地からの参加者、スタッフなど、総勢180名が集まり、アジア太平洋地域の障害者に関わる3つのトピックス、教育と障害者運動、啓発活動について話し合いました。

アジア太平洋諸国における障害者の現状は、未だ大変な状況にあります。大きな理由の一つは、“情報”の不足だと言えるでしょう。“情報”、特にロールモデルとしての当事者から得る情報は、障害者自身をエンパワーするためにとっても大切です。障害当事者と周りの人々の意識改革なくして、社会変革はありません。それを進めるには、当事者とサポーター双方の理解と協力は実現しないでしょう。

今年はアジア太平洋の10年最終フォーラムが日本で開催され、世界各国から障害者が一堂に集まります。さらに、来年以降「障壁からの解放」をテーマにした、アジア障害者の次の10年が始まります。様々なバリアーをなくし、障害者の自立・社会参画を進めていくためにネットワークを作り、情報と経験を分かちあうことが求められています。

こうした認識に立ち、アジア太平洋自立生活ネットワーク(Asian and the Pacific Network for Independent Living)を作り、以下の目的を実現するために共に歩んでいくことを、ここにアピールいたします。

名称：アジア太平洋自立生活ネットワーク

(Asian and the Pacific Network for Independent Living)

目的：

- ・ 障害者の自立生活の理念を広め、障害者のエンパワーをする。
- ・ 障害者の教育、雇用、生活のあらゆる面における社会参画を実現する。
- ・ 人権を獲得するための権利保障法の策定や制定に向けて働きかける。
- ・ あらゆるバリアーからの解放を目指す。
- ・ 情報や経験を共有し、国々の協力関係を強める。

第3期ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業研修生一同

International Symposium on Disability

Tokyo Appeal

We, the trainees of the 3rd Duskin Leadership Training in Japan from 9 countries, Indonesia, Korea, Sri Lanka, China, Nepal, Pakistan, Philippines, Malaysia and Mongolia, together with Japanese Leaders, held “International Symposium on Disability” in Tokyo on June 22, 2002. Approximately 180 participants from all over Japan joined us and discussed three topics, Education, Disabled Movement and Awareness.

The situation of persons with disabilities in Asia and the Pacific is still dreadful. One of the biggest reasons is the lack of information. The information, especially the one which get from disabled persons themselves is very precious for empowering us. There is no social change without improving people’s attitude. To promote the changes, it won’t be achieved without cooperation and understanding among persons with disabilities themselves and supporters.

In this year, International Forum on Disabilities to Mark the End Year of the Asian and Pacific Decade of Disabled Persons will be held and many disabled people will get together. In addition, the next decade focusing on freedom from barriers will start from next year. It is needed to establish network and to exchange information and experience for removing all barrier and promoting independence of persons with disabilities and society for all.

It is our pleasure to announce the establishment of the network named “Asian and the Pacific Network for Independent Living”. We will step forward with the following purposes into practice.

Name : Asian and the Pacific Network for Independent Living

Purposes :

- To promote the philosophy of Independent Living and empower persons with disabilities,
- To participate in a society on every field of life including education, employment and social life,
- To work on making Human Rights Act of persons with disabilities,
- To achieve freedom from all barriers, and
- To share various information and to straighten the relationship among our countries.

The trainees of the 3rd Duskin Leadership Training in Japan

「ダスキン・アジア太平洋障 害者リーダー育成事業」

事業概要

Summary of 「The Duskin Leadership Training Program in Japan; A Program for Persons with Disabilities in Asia and Pacific」

ダスキン・アジア太平洋障害者リーダー育成事業概要

1. 趣旨と特徴

本事業は、国連・アジア太平洋障害者の十年事業の一環として、財団法人広げよう愛の輪運動基金の委託により、アジア太平洋の各国で地域社会のリーダーを志す海外の障害をもつ若い世代を対象に、日本の福祉の現状を学び、自己研鑽に励むチャンスを提供することを目的として、平成11年度より実施されている。

政府などの公的な推薦を必要としない完全に公募による招聘事業であり、学歴や職歴は問わない。また、約10ヶ月という研修期間の中で、研修生が自ら希望する分野や関連施設で個別研修を行うというユニークな特徴を持つ。

もう一つの大きな特徴は、日本語を3ヶ月集中して学び、その後の研修を日本語で行うことから、日本や日本文化についての理解を深め、日本の障害者とより交流することができることにある。さらに、異なる国々の研修生が共に研修することにより、各国の障害者を取りまく現状を知り、将来のネットワークづくりに活かすこともできる。

2. 研修期間：約10ヶ月（9月初め～翌年6月末）

3. 受入れ対象地域：アジア・太平洋地域（オセアニア地域除く）

4. 受入れ人員：10名

5. 応募条件

- (1) 障害をもつ本人で、将来リーダーとして地域社会に貢献したいと志す個人。
- (2) 応募年齢は原則として18歳以上25歳まで。
- (3) 連続した約10ヶ月間の日本における研修に耐える力があり、日本の生活に適應できること。
- (4) 日本語（日本手話）または英語（アメリカ手話）で行われる日本語（日本手話）の研修を受講するコミュニケーション能力があること。
- (5) 基本的に日常生活動作が自分でできること。
- (6) 研修に先立ち各国で実施する面接、及びオリエンテーションに参加できること。
- (7) 研修計画を自ら立案できること。
- (8) 不測の事故等を含め、すべてのリスクを自己責任で負担できること。

6. 選考方法

申込書（私の研修計画）をもとに実行委員会が審査し、研修候補生を選出する。その後、選出された研修候補生に対し、実行委員が候補生の母国で直接面接を行い、その結果に基づいて実行委員会で審査し最終的に決定する。

7. 研修内容

(1) 日本語研修

来日後約3カ月間にわたり、日本語（或いは日本手話）での会話を中心に基本的な読み

書きまでの研修を集中して行う。

(2) 個別研修

各研修生の希望に基づいて関心を持つ分野やニーズを考慮し、日本各地の施設および団
体で体験研修を行う。また、コンピュータ関係の技術や知識の習得については、帰国後
もパソコンを活用できるよう研修を行う。

(3) 講義

日本の障害者の現状を理解し、母国での地域活動の参考にしてもらうことを目的に、当
協会スタッフをはじめとして各分野の専門家や研究者の講義を受ける機会を設ける。

(4) 施設見学および、セミナーや会議への参加

講義内容などに関連した施設の見学を行い、またセミナーや会議などに参加すること
により、知識を得たり人とふれあひいろいろな理解を深める。

(5) スポーツ及び、レクリエーション

水泳やスキー、他のスポーツをすることにより健康管理を行い、バーベキューパーティ
などのレクリエーションを通して生活の向上を図る。

(6) その他

日本の障害当事者とのディスカッションや発表会（日本語・総括等）を通じて研修生同
士や日本の関係者と意見を交換し、リーダーシップ向上の機会を持つ。

各種交流会・行事への参加、レセプション、ホームステイなどを行い、研修生同士や日
本の関係者、日本で出会った友人等と様々な交流を深める。

8. 研修の言語：原則として日本語（日本点字、日本手話を含む）を使用。

9. 研修施設

日本語研修中は、主に当協会所在地である戸山サンライズに滞在。個別研修期間中は各
地施設。

10. 研修の評価

(1) 各研修生は3カ月間の日本語研修終了時に、日本語研修の成果を表すために、日本語に
よる成果発表を行う。

(2) 各研修生は10ヶ月間の研修終了時に日本語による報告書を提出し、研修の内容やその
中で得た知識、経験について日本語による総括発表を行う。

(3) 実行委員会ならびに事務局は、研修終了後、研修生が提出した報告書などをもとに、プ
ログラムについての総括・評価を行う。

11. 研修主催機関

財団法人広げよう愛の輪運動基金

〒564-0051 大阪府吹田市豊津町 1-33 ダスキン本社ビル内

電話：06-6821-5270 FAX：06-6821-5271

12. 研修実施機関

財団法人日本障害者リハビリテーション協会

〒160-0052 東京都新宿区戸山 1-22-1 電話：03-5273-0601 FAX：03-5273-1523

13. 体制

実行委員 (平成14年7月31日現在；50音順)

委員長 青柳 紀 (財) 広げよう愛の輪運動基金・理事

委員 伊方 博義 (社福) 太陽の家・事務局次長

委員 五十嵐 紀子 (社福) 光友会・専務理事

委員 太田 好泰 日本障害者芸術文化協会

委員 大杉 豊 (財) 全日本聾啞連盟・本部事務所長

委員 奥平 真砂子 (財) 日本障害者リハビリテーション協会・研修課長

委員 河村 宏 (財) 日本障害者リハビリテーション協会・国際部長

委員 寺島 彰 国立身体障害者リハビリテーションセンター研究所

障害福祉研究部長

委員 野村 美佐子 (財) 日本障害者リハビリテーション協会・情報企画課長

委員 牧田 克輔 (社福) 日本盲人会連合・情報部長

委員 宮城 まり子 ねむのき学園・理事長

委員 山岸 宏 (財) 広げよう愛の輪運動基金・専務理事

委員 山口 和彦 東京都視覚障害者生活支援センター・課長

委員 山本 好男 (財) 広げよう愛の輪運動基金・事務局長

事務局 (日本障害者リハビリテーション協会・国際部研修課)

河村 宏

奥平 真砂子

和山 貴子

滝沢 彰子

那須 里美

大野 真理

鈴木 淳也

吉村 伸

国際障害者シンポジウム 報告書

発行日：2002年8月20日（火）

発行：財団法人 日本障害者リハビリテーション協会
〒162-0052 東京都新宿区戸山1-22-1 戸山サンライズ内
TEL (03) 5273-0601 FAX：(03) 5273-1523
Email [invitation@dinf.ne.jp]

編集：国際障害者シンポジウム実行委員会
財団法人 日本障害者リハビリテーション協会

印刷：株式会社 功文社

この資料集は、[財団法人 広げよう愛の輪運動基金] の助成により作成されています。